―桃生郡北上町―

長塩谷板碑群
第二次調査報告

宮城県桃生郡河北地区教育委員会
昭和六十二年八月

序

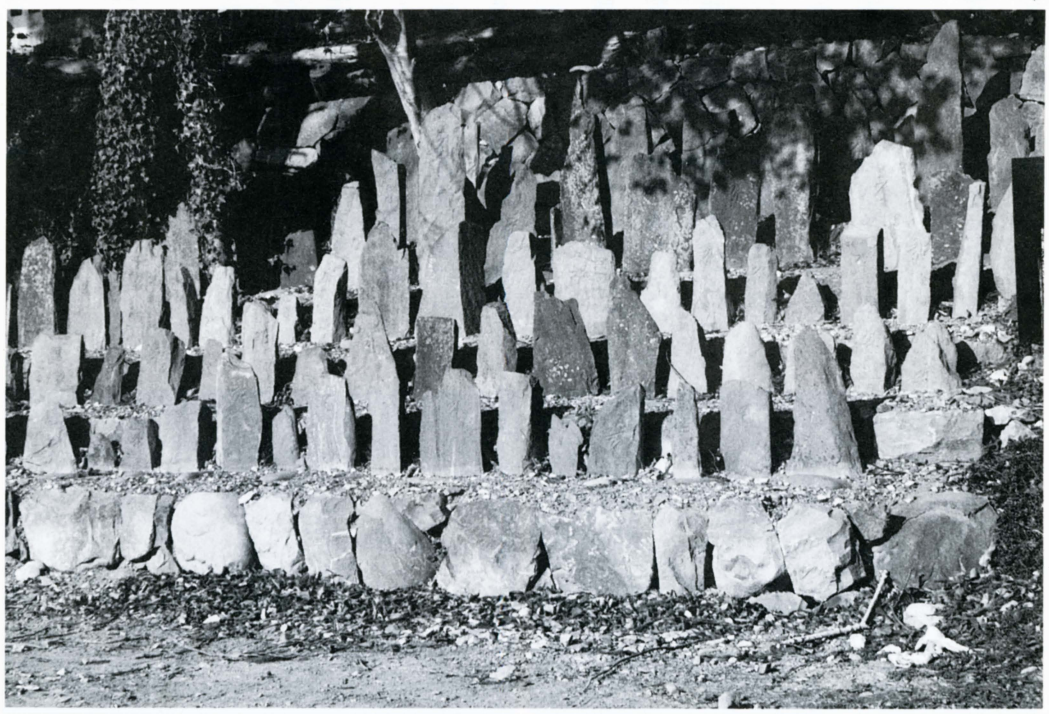
桃生郡河北地区教育委員会
教育長　千葉和音

昭和五十八年第一次発掘調査により、長塩谷板碑群は、量的にも質的にもすぐれた中世史料であることが明らかになりました。その後、断続的に板碑群が存在する急傾斜地の崩落が続き、更に多くの板碑が発見されています。

今回、石巻土木事務所が「急傾斜地危険区域」対策防護壁を構築することになり、同板碑群遺跡の記録保存並びに出土した板碑の整備保存の必要から、第二次発掘調査を実施しました。調査を担当した文化財保護委員長紫桃正隆氏により、その成果をおまとめいただきましたので、前報告書同様資料として、広く活用されることをのぞみます。

最後に、本書の刊行にあたりまして、関係されました方々の御尽力に深甚なる感謝の意を表します。

昭和六十三年二月



移設現地

一、調査主体　宮城県桃生郡河北地区教育委員会、同文化財保護委員会

二、調査担当者　調査責任者　紫桃正隆（同文化財保護委員長）
調査員　西條久雄（同文化財保護副委員長）
〃　今野清幸（同文化財保護委員）
〃　館岡栄志（〃〃）
特別調査員　高橋精一（「石巻石佛研究会」副会長）
〃　舘田虎弥太（前河北地区文化財保護副委員長）
調査助手　西島恵美（石巻市誌編纂室嘱託）
〃　武山明（県立飯野川高校生）
事務局　遠藤定治（河北地区教委社会教育課長）
〃　宇佐美研（同社会教育主事）
特別協力員　中村光一（石巻文化センター学芸員）
勝倉元吉郎（「石巻石佛研究会」会長）

三、期間　昭和六十二年八月一日～八月十日

四、所在地　宮城員桃生郡北上町十三浜字長塩谷五十七
佐藤さかえ氏宅裏地

五、地主　前同

六、調査の経緯と概要

北上町長塩谷の部落裏山、特に古い時代に月浜へ通じた旧街道脇の山裾付近は、板碑の群立地帯で、この板碑群は昭和五十八年に行われた地区教委の調査によって六十三基が発掘収集された。これが第一次調査である。調査結果

は報告書に作制されると共に、当該碑群は約百米ほど北に位置する春日神社社地脇に運ばれ、二段にしつらえた壇上に報告書と照合できる順番に並べ建立し、移設作業は完了した。

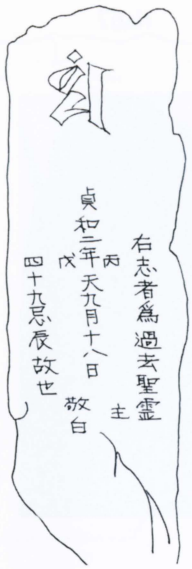
板碑がもともと造立されていた現地は、山の急斜面に立地していたため、ある時期に発生した山崩れにあい、流出、あるいは埋没してしまい、現状に復するのは不可能の状況にあった。文化財遺物を安全且、保護の容易な新施設に移転せざるを得ない、前記のゆえんであったが、自然現象に伴う地表の変化で、再度、未確認の新遺物が出現するであろうとは凡その予想であった。あにたがわず、以来四年の間にかなりの数の石造物が出現、収集され、そして今回の二次調査の運びとなった。

今回の調査は昭和六十二年八月一日にはじまり同月二十日に終了した。調査対象となった石の数は三十四基である。まとめの項で詳述してあるが、碑数は少なかったものの板碑研究の上で貴重な発見があり、画期的な成果を挙げ得たと思う。なお、本調査報告書は一次調査報告に引続く全くの続編であるので、本来詳細を綴るべき埋蔵遺跡を中心とした歴史背景、現地事情などは前報告書にゆだねることとし、すべて省略した。詳細を知るには一次、二次両報告書を併せ照合することが望ましい。

長塩谷板碑群一覧表

（No.63 ～ No.96）

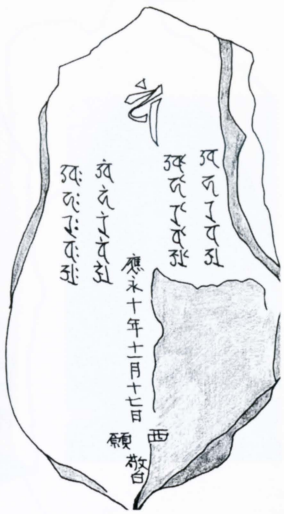
No.64



種　子	マン　文殊菩薩
年　号	貞和２年　1346　南北朝初期
偈	
その他	四十九日供養碑　粘板岩

H：137cm　W：30cm　T：７cm

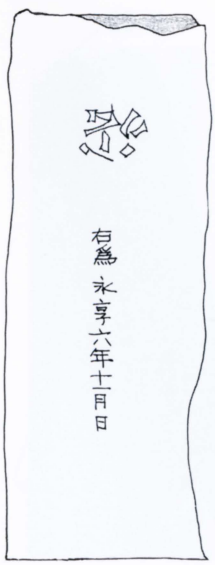
No.63



種　子	バン　大日如来（金剛界）
年　号	応永10年　1403　室町初期
偈	五輪塔婆（発心門、修行門、菩提門、涅槃門）
その他	西願供養の碑　粘板岩

H：96cm　W：45cm　T：10cm

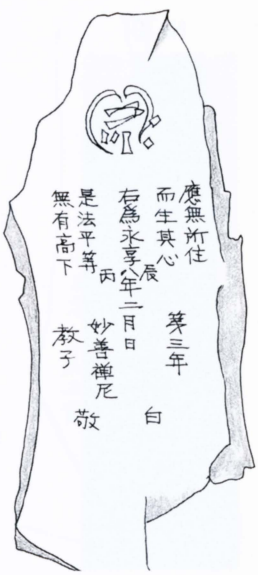
No.66



種　子	タラーク　虚空蔵菩薩
年　号	永享６年　1434　室町初期
偈	
その他	三十三回忌供養碑　粘板岩

H：77cm　W：19.5cm　T：６cm

No.65



種　子	キリーク　阿弥陀如来
年　号	永享８年　1436　室町初期
偈	
その他	種子は𑖀の荘厳体 種子・銘文とも金箔で厳飾　砂岩

H：85cm　W：23cm　T：14cm

No.68

種　子　サ　観世音菩薩

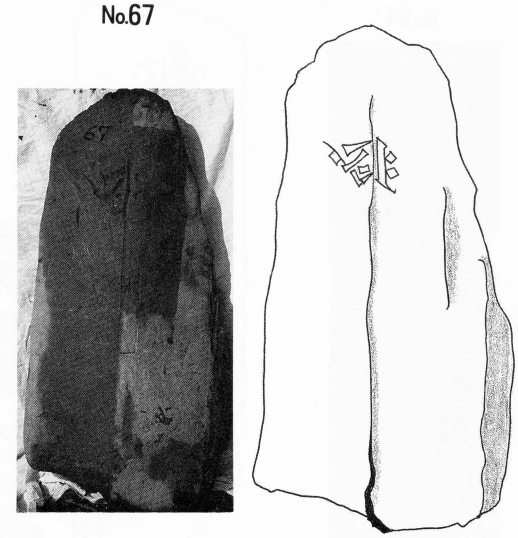
年　号

偈　往生要集

その他　佳仙禅門百ヶ日供養碑　断碑
種子・銘文は金箔にて厳飾　粘板岩

H：50cm　W：30cm　T：6cm

No.67



種　子　サク　勢至菩薩

年　号

偈

その他　一周忌供養碑　粘板岩

H：55cm　W：25cm　T：6cm

No.70

種　子　サ　観世音菩薩

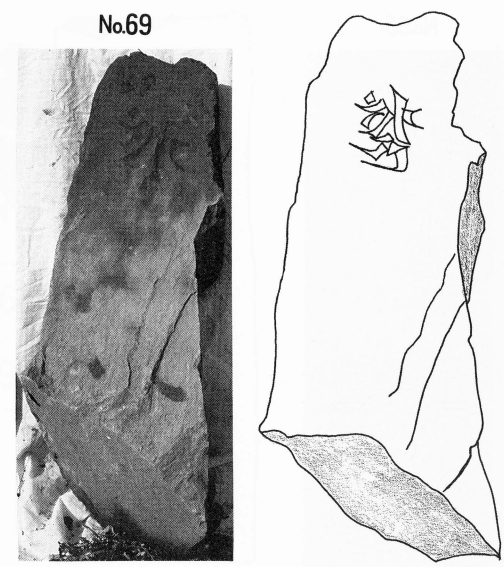
年　号

偈

その他　道永の百ヶ日供養碑
種子・銘文金箔にて厳飾　粘板岩

H：54cm　W：12.5cm　T：7.5cm

No.69



種　子　バアンク　大日如来（胎蔵界）

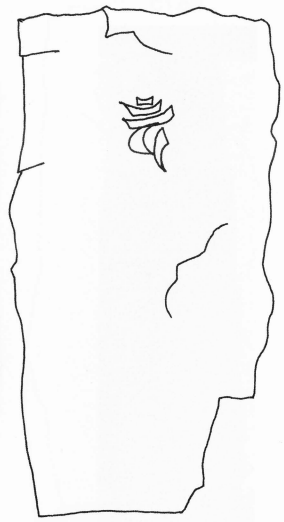
年　号

偈

その他　粘板岩

H：50cm　W：14.5cm　T：5cm

No.72



種　子　バン　大日如来（金剛界）

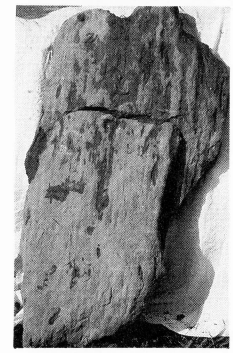
年　号

傷

その他　種子は皿彫　粘板岩

H：65.5cm　W：33.5cm　T：7cm

No.71



種　子　ベイ　薬師如来

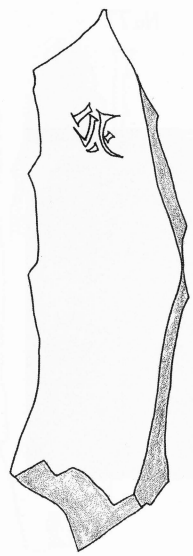
年　号

傷

その他　断碑　種子は金箔で厳飾　粘板岩

H：64cm　W：37cm　T：3.5cm

No.74



種　子　タラーク　虚空蔵菩薩

年　号

傷

その他　種子は金箔で厳飾　粘板岩

H：70cm　W：29cm　T：10cm

No.73

種　子

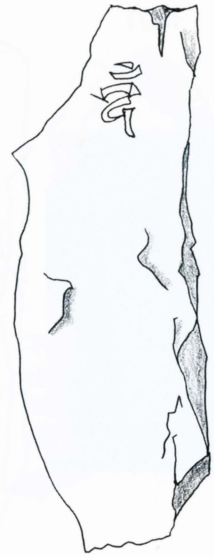
年　号

傷　往生要集

その他　断碑　銘文は金箔で厳飾　粘板岩

H：60cm　W：20cm　T：13cm

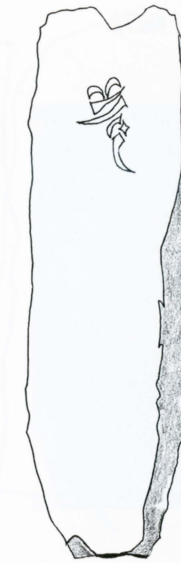
No.76



種　子	バン　大日如来（金剛界）
年　号	
偈	
その他	粘板岩

H：69cm　W：23cm　T：6 cm

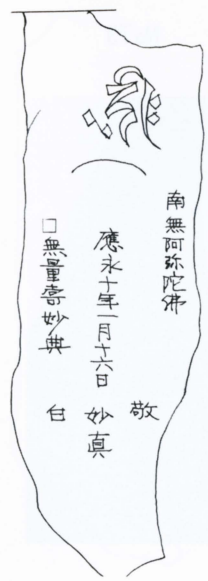
No.75



種　子	ベイ　薬師如来
年　号	
偈	
その他	種子は金箔で厳飾　粘板岩

H：68cm　W：14.5cm　T：10cm

No.78



種　子	キリーク　阿弥陀如来
年　号	応永10年　1403　室町初期
偈	無量寿妙典
その他	妙真の三周忌供養碑 粘板岩　円相上部のみあり

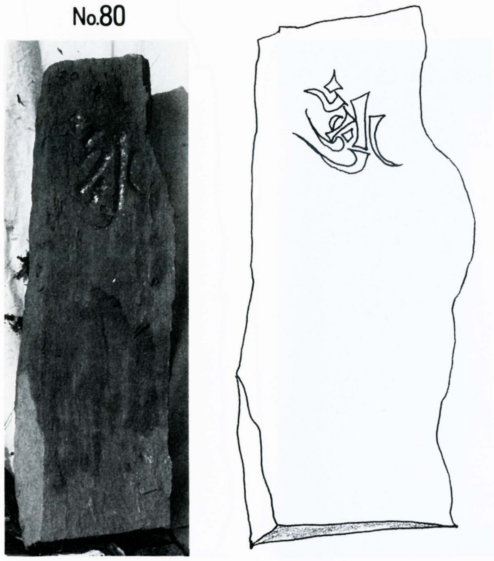
H：75cm　W：16cm　T：7 cm

No.77

種　子	サ　観世音菩薩
年　号	
偈	
その他	道永の百ヶ日供養碑　粘板岩

H：64cm　W：40cm　T：9 cm

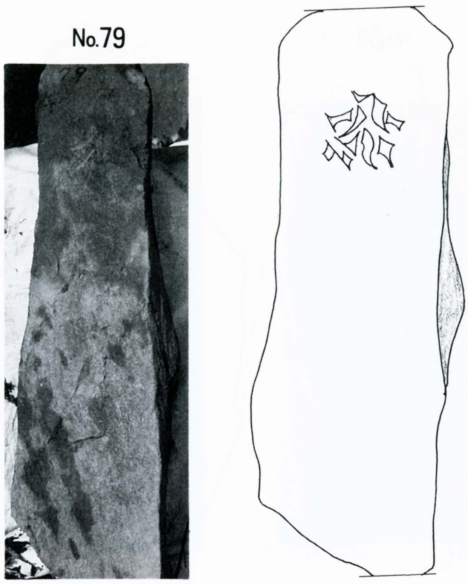
No.80



種　子	バアンク　大日如来（胎蔵界）
年　号	
傷	
その他	種子は金箔で厳飾　粘板岩

H：38cm　W：10.5cm　T：6cm

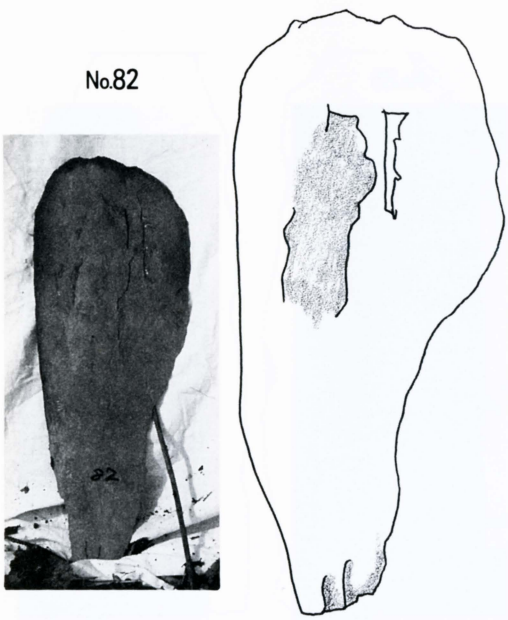
No.79



種　子	キリーク　阿弥陀如来
年　号	
傷	
その他	粘板岩

H：84cm　W：20cm　T：8cm

No.82



種　子	右側のみで判読不能
年　号	
傷	
その他	金箔にて厳飾　粘板岩 本遺跡では最小の碑である

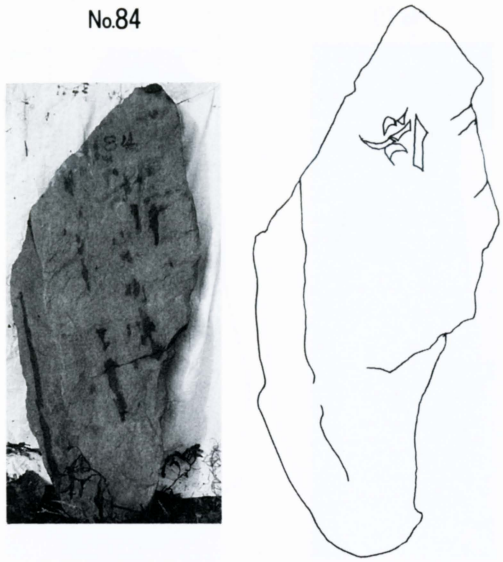
H：28cm　W：10cm　T：2.5cm

No.81

種　子	サク　勢至菩薩
年　号	
傷	
その他	妙春の一周忌供養碑 金箔にて厳飾　粘板岩

H：70cm　W：18cm　T：13cm

No.84



種　子	サ　観世音菩薩
年　号	
偈	
その他	粘板岩

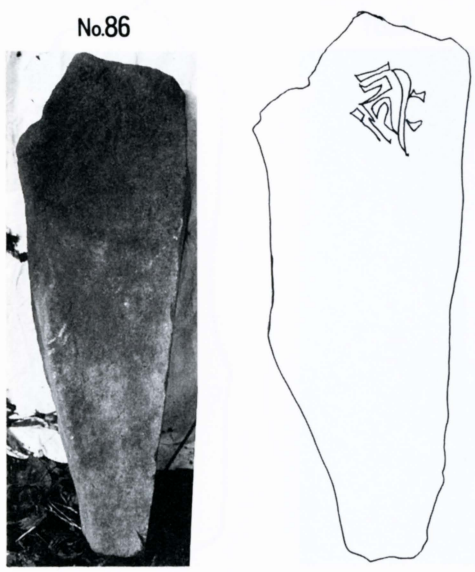
H：61cm　W：28cm　T：7.5cm

No.83

種　子	バン　大日如来（金剛界）
年　号	延慶２年　1308　鎌倉末期
偈	
その他	中央裂断　粘板岩

H：87cm　W：24cm　T：5.5cm

No.86



種　子	キリーク　阿弥陀如来
年　号	
偈	
その他	花崗岩

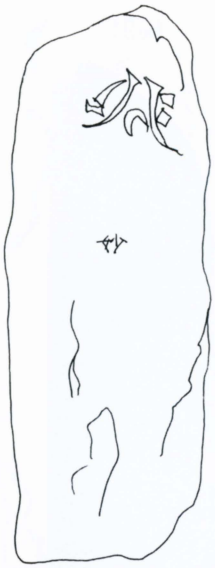
H：58cm　W：15cm　T：11.5cm

No.85

種　子	アン　普賢菩薩
年　号	
偈	
その他	種子は平彫　花崗岩

H：90cm　W：24cm　T：16cm

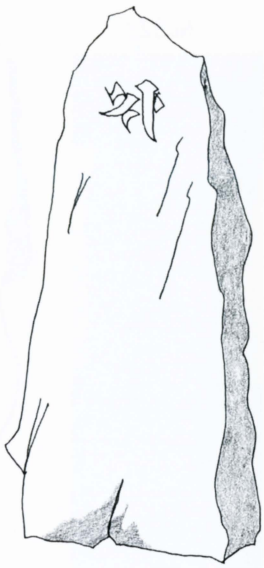
No.88



種　子	サク　勢至菩薩
年　号	
傷	
その他	妙□の墨書あり 金箔で厳飾　粘板岩

H：56cm　W：15cm　T：7cm

No.87



種　子	サク　勢至菩薩
年　号	
傷	
その他	種子は金箔で厳飾　粘板岩

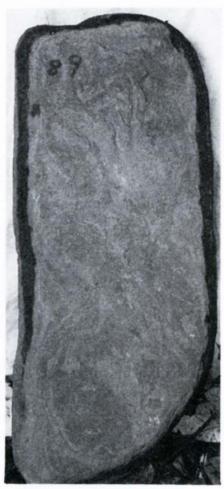
H：62cm　W：20cm　T：11cm

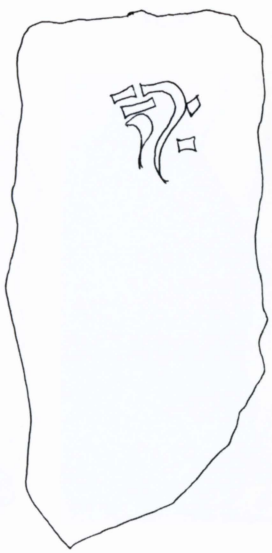
No.90

種　子	サ　観世音菩薩
年　号	
傷	
その他	種子は金箔で厳飾　粘板岩

H：65cm　W：16.5cm　T：8cm

No.89

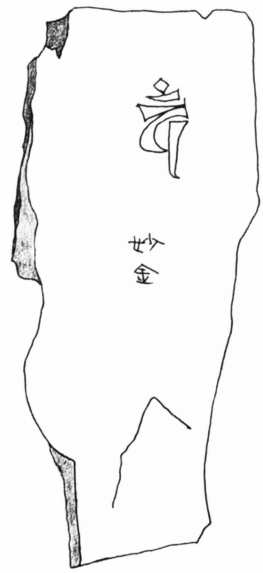




種　子	キリーク　阿弥陀如来
年　号	
傷	
その他	種子は平彫、ノミの跡あり 金箔で厳飾　粘板岩

H：47cm　W：19cm　T：7cm

No.92



種　子	バン　大日如来（金剛界）
年　号	
傷	
その他	妙金の墨銘あり 種子銘文は金箔で厳飾　粘板岩

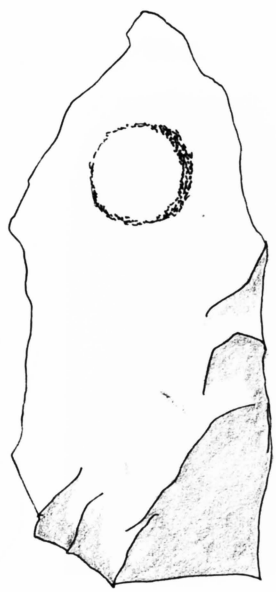
H：53cm　W：16cm　T：7cm

No.91

種　子	
年　号	
傷	
その他	妙永禅尼の供養碑　断碑 銘文は金箔で厳飾　粘板岩

H：60cm　W：13cm　T：11cm

No.94



種　子	
年　号	
傷	
その他	○地蔵マーク　粘板岩　金箔で厳飾

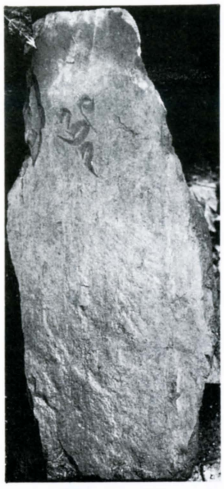
H：49cm　W：21cm　T：7cm

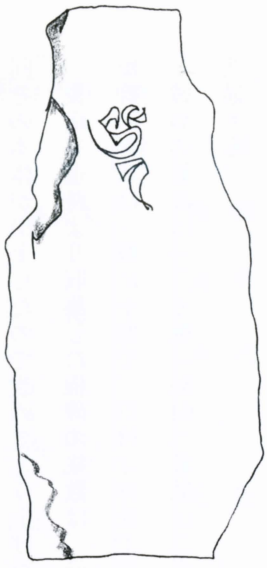
No.93

種　子	バン　大日如来（金剛界）
年　号	
傷	
その他	種子は金箔で厳飾　粘板岩

H：44cm　W：14.5cm　T：10cm

No.96





種　子	ベイ　薬師如来
年　号	
偈	
その他	粘板岩

H：60cm　W：24cm　T：5 cm

No.95

種　子	バン　大日如来（金剛界）
年　号	応永２年　1395　室町初期
偈	
その他	粘板岩

H：90cm　W：24cm　T：16cm

まとめ

一、今回収録した碑数はNo.63からNo.96までの三十四基である。その個々については前記一覧表に詳記してある。但し、No.63は一次調査の最終番号で、この碑は以前に舘田虎弥太が記録したものを、実物が発見できぬまま、野帳より写して掲載したので重複している。今回その本体が出土したので改めてとり上げた。

二、長塩谷遺跡より収集した板碑の総数は、一次のものと合わせ九十六基となり、石巻地方での単一遺跡では最多な数となる。

板碑の形状は一般に小型で、石材は付近より容易に採集できる粘板岩、花崗岩、砂岩の類である。

碑高の最高は一三七糎（No.64）、最低は二十八糎（No.82）で、平均が七〇～八〇糎、概して小型で素朴な造りであるのが一次調査と共通する。

三、紀年銘の明らかな碑は意外と少く、七基に過ぎない。紀年銘を有する碑の通番（No.）を年代順に並べたのが【表1】で、それを造立年代分布数としてまとめたのが【表2】である。

【表1】

有紀年板碑の通番(No.)一覧表

年号	年	通番
延慶	2 (1309)	83
貞和	2 (1346)	64
応永	2 (1395)	95
〃	10	63
〃	10	78
永享	6 (1434)	66
〃	8	65
計 7 基		

〈注〉応永10年(63)は一次調査と重複して計算してある。

【表2】

有紀年板碑年代別分布数

年号	数	
延慶	1	鎌倉末
貞和	1	南北朝初
応永	3	室町初
永享	2	
計 7基		

更に本遺跡の結果を綜合的に見るため、一次、二次両調査結果を綜合した。　全体の「有紀年板碑の通番(No.)一覧表」は【表1綜】となり、全体の「有紀年板碑年代別分布数」は【表2綜】となる。

【表1綜】

有紀年板碑の通番(No.)一覧表

年号	年	通番	年号	年	通番
延慶	2 (1309)	83	応永か？		46
貞和	2 (1346)	64	永享	2 (1430)	40
貞治	2 (1363)	14	〃	2	42
〃	2	36	〃	3	26
応安	5 (1372)	3	〃	4	37
〃	6	35	〃	5	38
〃	7	47	〃	5	41
〃	7	58	〃	5	49
康応	2 (1390)	32	〃	5	52
〃	2	62	〃	6	5
応永	2 (1395)	20	〃	6	66
〃	2	95	〃	6	30
〃	6	29	〃	7	33
〃	9	12	〃	8	65
〃	10	63	永享か？		16
〃	10	78	天文	17 (1548)	4
〃	12	27	延慶2年 (1309) ～天文17年 (1548)		
〃	14	31			
〃	18	1			
〃	22	2	計 36 基		

【表2綜】

有紀年板碑年代別分布数

年号	数	
延慶	1	鎌倉末
貞和	1	(初)
貞治	2	南(中)
応安	4	北
康応	2	朝(末)
応永	9	室
永享	12	(初)
天文 (1532)	1	町 (末)
計	36基	

有紀年板碑（年号が読みとれる板碑）は二次調査では七基発見され、一次、二次綜合では三十六基となる。それを年代別に分類すると、応永、永享年間など、いわゆる室町時代初期（一四〇〇頃）のものが圧倒的に多く、二十一基で、全体の六〇％を占める。そして南北朝期のものがこれに次ぐ。

四、種子（梵字）が彫られた碑（有種子板碑）は三十一基で、全体の八十六％に達する。それを種子別に分類したのが【表3】で種子の中で格別に多く見られたのは（7）（6）（5）などであった。十三佛信仰に伴う種子配列は、室町時代に入り確立されていて、本碑の造立の多くは室町初期になされているので、丁度十三佛配列の原則が導入された時代と一致する。その原則に従って解釈すると、バン（十三回忌）、サ（百ヶ日）、キリーク（三周忌）が断然多かったということになる。その傾向は現代の祭祀風習と共通するように思われる。

なお、有種子板碑を一次、二次と併せ綜合したのが【表3綜】である。有種子板碑の合計は九十七基（三尊形式がある

【表3】

有種子板碑種子別分類表

種子		年忌	板碑数	No.
（マン）	文殊菩薩	三七日	1	64
（アン）	普賢菩薩	四七日	1	85
（ベイ）	薬師如来	七七日	3	71.75.96
（サ）	観世音菩薩	百ヶ日	6	68.70.77 84.87.90
（サク）	勢至菩薩	一周忌	3	67.81.88
（キリーク）	阿弥陀如来	三周忌	5	65.78.79 86.89
（バン）	大日如来 （金剛界）	十三回忌	7	63.72.76 83.92.93 95
（タラーク）	虚空蔵菩薩	三十三回忌	2	64.74
（バアンク）	大日如来 （胎蔵界）	五点具足	2	69.80
○（イーの略）	地蔵菩薩		1	94
計 31 基				

【表3綜】

有種子板碑種子別分類表				
種子			年忌	板碑数
𑖨	(マン)	文殊菩薩	三七日	1
𑖩	(アン)	普賢菩薩	四七日	1
𑖭	(カ)	地蔵菩薩	五七日	9
𑖮	(ベイ)	薬師如来	七七日	11
𑖯	(サ)	観世音菩薩	百ヶ日	21
𑖰	(サク)	勢至菩薩	一周忌	13
𑖱	(キリーク)	阿弥陀如来	三周忌	14
𑖲	(ウーン)	阿閦如来	七周忌	3
𑖳	(バン)	大日如来	十三周忌	16
𑖴	(アァンク)	大日如来	(五点具足)	1
𑖵	(タラーク)	虚空蔵菩薩	三十三回忌	3
𑖶	(バアンク)	大日如来	(五点具足)	3
○	(イーの略)	地蔵菩薩		1
				計97

注1．年忌供養としての上記十三佛の配列は室町以降の配列といわれ、南北朝期、鎌倉期のものには適合できない。

2．𑖴(胎蔵界) 𑖶(金剛界) など大日種子の五点具足は十七年忌、二十三年忌、二十七年忌、五十年忌、百年忌などに用いられる。

3．当地区の板碑には三尊形式をなすものが数基あるため延数が碑の合計数よりも多くなった。

ので重複して計算され実数より多くなる）にのぼるが、格別に多く使われる種子（格別に多い年忌）とか分布の傾向は一次、二次ともに共通している。

また種子の彫刻技法の面でいえばNo.75、No.85、No.89のように平彫り、皿彫りの形式が見られ、技法面では注目される。

種子以外の銘文は割合に少く、単に種子だけのものが圧倒的に多い。これは最初から銘文を入れぬのでなく、のちに消滅したのではないかとの疑念がもたれる。（七の項、参照）

偈として明瞭に読みとれるのは往生要集、の一文（No.73）だけであった。

五、種子、銘文を金箔で以て厳飾したものは十八基で、五〇%を占める。これは一次調査の総括と共通するもので、本遺物の一つの特長といえる。

六、物故者年忌供養のうち、特定の人物に対する複数の供養碑が発見できたのは本遺跡の大きな特長であることは一次調査のまとめでも述べたが、今回もまた被祭祀者の名が多く浮び上った。例えば妙善禅尼(No.65)、佳仙(No.68)、道永(No.70、77)、妙真(No.78)三回忌、妙春(No.81)一周忌、妙永(No.91)、妙金(No.92)などがこれである。前調査のものにこれを加えると一段と祭祀のさまが鮮明となり資料価値が高められる。一次、二次を綜合したものの中から数例を選び、次に再掲して参考に供したい。

同一遺跡において特定の物故者に対する複数の板碑が出現する例は稀で、珍重すべき資料といわねばならない。河北地区内では先き(昭和五十八年)に二例発見され、今回の長塩谷からは五例発見されている。しかも重複といっても三回以上の重複も見られるのである。一例を(イ)「了

(イ)

了覚禅門供養の碑

No. 49	No. 38	No. 41	No. 30	No. 33
永享五年　丑 癸　了覚禅門	永享五年今月日　丑 癸	永享五年　丑 癸　了覚禅門	永享六年今月日　甲 刀　了覚禅門 一周忌	右為永七年今月日　乙 卯　了覚禅門第三年
了覚禅門の五七日([illegible])供養	同人七七日([illegible])供養と推定	同人百ヶ日([illegible])供養	同人一周忌([illegible])供養	同人三周忌([illegible])供養

(ロ)

妙月禅尼供養の碑　注・妙月は了覚の妻か？

No. 40	No. 42	No. 26
永享二年六月十六日　妙月禅尼	永享二年　妙　月	永享三年四月二十八日　妙月
妙月禅尼七七日([illegible])供養碑	同人百ヶ日([illegible])供養 No.40より四月二十八日死か No.26	同人一周忌([illegible])供養

覚禅門」にとって考察しても、この人の場合の供養碑としては、五七日（ㄱ）、七七日（ㄱ）百ヶ日（ㄱ）一周忌（ㄱ）三周忌（ㄱ）と、連続して六個の碑が発見できた。しかも種子の彫刻が、十三佛配列の原則を踏襲していて、その理論の正しさを証明する。他の㈺妙月禅尼、㈠西願禅門、㈡佳仙禅門の場合も全く同断である。管見であるが、県内においては稀有の例だと思考される。将来、板碑研究、特に室町時代以降の種子と十三佛配列の関係を研究する上で、好個の資料となり得ると信ずる。

七、今回の調査において、もう一つの画期的発見があった。それはNo.92の碑を精査した際、銘文の一部に墨銘が確認されたことである。すなわち、種子ㄱの下十五糎の所に、金箔で彩れた「妙金」という被祭祀者の名前が判読され、更にその文字の下書は、墨書されていたことが判った。

㈠ 西願禅門供養の碑

No. 27	No. 19	No. 34	No. 63
ㄱ 右志者応永十二年十月　日 西　願	ㄱ 右志者応永十八年三月十一日	ㄱ 西　願 禅　門	ㄱ 応永十年十一月十七 西　願
西願禅門 百ヶ日（ㄱ）供養	同人七回忌 供養と推定 No.27と同五輪塔形式	同人十三回忌 （ㄱ）供養か？ 応永二十四年か？	同人死の二年前 逆修碑か？

㈡ 佳山禅門供養の碑

No. 68	No. 37	No. 52
ㄱ 佳仙禅門	ㄱ 佳仙禅門 永享二年十一月二十日	ㄱ 永享五年七月十日　右佳仙禅門
佳仙禅門 百ヶ日（ㄱ）供養	佳仙禅門 一周忌（ㄱ）供養	同　人 三周忌（ㄱ）供養

換言すれば、墨書の銘文の上に金箔を施したものであることが判明したのである。

本碑は石巻文化センターに運ばれ、同センター学芸員中村光一、石巻石佛会の勝倉元吉郎らにより仔細に検討が加えられ、更に真正が裏づけられた。なおのちに同遺物の一基No.88の碑の中央部にも「妙」の墨銘があることも確認された。No.92の碑については八月二十一日、石巻文化センターにおいて、調査班より各新聞記者会見の形で発表があり、同月二十二日各社新聞で報道された。内容はほぼ同じなので「石巻日々新聞」記事を下に掲載する。

板碑には石文（文字）として彫刻の他に墨書があったのではないか、とは研究家誰しもが懐く素朴な疑問であった。しかしその手掛りが得られなかったのは五百年という風雪を経ることで跡かたなく洗い流されてしまったためであろうか。今回の調査によって従来の研究者の願望

"墨書金箔"の板碑

十三浜で発見　全国初、貴重な資料に

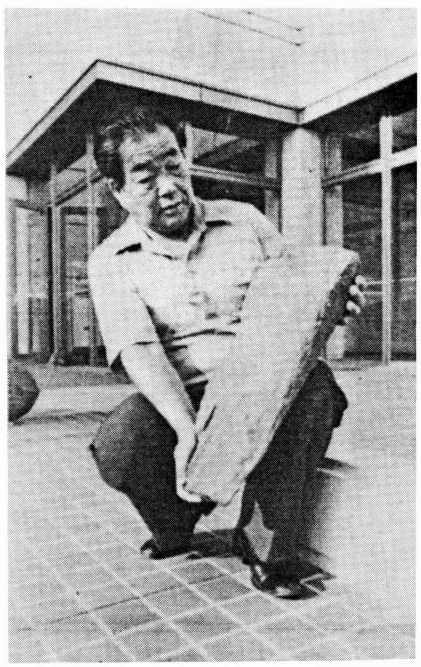
北上町十三浜で板碑の調査を実施していた河北地区教育委員会は、同所長塩谷五七、佐藤さかえさん宅裏山から全国でも初めてという墨書金箔（ばく）で記した板碑を発見した。二十日午後、石巻文化センターで記者発表を行った紫桃正隆河北地区文化財保護委員長は「種子だけを石に刻んだ板碑はいくつもあるが、今回、墨書金箔の板碑が発見されたことで、これまで種子の下に何も書かれていなかった板碑も墨書金箔、あるいは墨だけで書かれた可能性が強い」として、調査方法の見直しを説いている。

板碑は鎌倉時代から室町時代にかけ、追善供養の目的で建てられた卒塔婆。一般的には上部に仏像や種子（梵字）などが彫られ、その下に建設趣旨、法名などが刻まれている。石巻地方にはこうした板碑が多く発見されているが、種子だけの板碑もあって、郷土史研究家たちは「なぜ建設趣旨や法名を書かなかったのか」という疑問を投げていた。

長塩谷で見つかった墨書金箔の板碑は、こうした疑問を説くカギになる公算が強い。問題の板碑は粘板岩でできており、室町時代のものとみられる。大きさは高さ五十三㌢、幅十七㌢、厚さ八・五㌢。種子は十三回忌を意味する金剛界大日如来の梵字が彫まれ、金箔が埋め込まれている。さらに、最大の特徴はその下に書かれた墨書金箔。肉眼でようやく判読できる程度だが「妙金」と墨で書かれ、その上に金箔が張ってある。

墨だけのものなら雨で流れてしまい、また、金箔をほどこしても短期間で消えてしまうのが通常。だが、発見された状況が土中であったため、墨書金箔が確認された。このほか同所では昭和五十八年の一次調査以来、百二基の板碑が出ているが、現在まで墨書金箔が確認されたのは一基のみ。

しかし、半分以上が種子の下に何も書いていない板碑で調査関係者らは「これらの中にも墨書金箔があったのではないか。今回の板碑はそれを裏付ける貴重な資料といえる」と語っている。



全国でも初めてという墨書箔で荘厳さを出した板碑

発見されたのは一基　室町時代のものか

と疑問が、達せられ、氷解されたとしたら本調査の挙げた成果は極めて大きなものがあったと言わざるを得ない。

二次調査においては三十六基という割合に小規模な調査であったが、前記のように、墨書銘の碑が発見され、板碑研究に画期的な展望が開かれたこと、あるいは同一物故者に対する重複した年忌供養の例証が挙げられて、種子と十三佛配列の関係が実証されたことなど、思いもかけない大きな成果を挙げて終ることができた。

一次調査ののち保存遺跡として移設した現地は、国道三九八号線拡張整備事業、特に長塩谷～白浜間のトンネル道に当るため再度移転を余儀なくされた。新祭祀地は現地のわずか西寄りの所で、社地脇の山裾に三段の壇をしつらえ、一次、二次調査の碑すべて合わせ、整然と建立し、篤く祭祀した。

茲に町当局、部落挙げての援助に、心より敬意を表すると共に、重要文化遺産が、無事にしかも良い環境の元に保護、再元できたことを深く感謝申し上げる次第である。

昭和六十二年十二月

報告書作制者　紫　桃　正　隆

写真トレース　（右　同）

長塩谷板碑群 第二次 調査報告

昭和63年1月25日　印刷
昭和63年1月31日　発行

発　行　桃生郡河北地区教育委員会
宮城県桃生郡河北町相野谷字旧会所前29の1

編集者　紫　桃　正　隆
（桃生郡河北地区文化財保護委員長）

印　刷　株式会社　鈴木印刷所
石巻市蛇田字新谷地前121